

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレー語月刊誌『カラム』の復刻

山本博之(京都大学地域研究統合センター准教授)

Facebookなどのソーシャルネットワークの普及が著しいマレーシアで、伝統的なメディアである雑誌にも再び熱い視線が向けられている。一部は新たな装いで復刻され、時を超えて人々の思索を結びつけるとともに、過去の記事をローマ字化して電子書籍で復刻するという新しいビジネスモデルも生み出している。その例の1つである『カラム』の復刻では、創刊者の遺族たちが四十数年の時を経て亡き父親の仕事と対面する機会となった。

『カラム』は、1950年にシンガポールで創刊され、創刊者のエドルス(1911~1969)が亡くなる1969年まで20年続いた長命のマレー語月刊誌だ。アラブ系のムスリムとして生まれたエドルスは、1930年代のマラヤやシンガポールで「マレー人」という民族アイデンティティが強まり、アラブ系やインド系のムスリムが排除されていったことに対し、民族や国境を越えたムスリム同胞の団結を『カラム』誌面を通じて訴えた。

『カラム』は、表紙や誌面に写真を多く使って親しみやすい体裁を取っていたが、内容は硬派の雑誌として知られていた。エドルスは権威や権力に批判的で、特にマレー人政治家やイスラム指導者たちを正面から批判したため、マレー人政党である統一マレー国民組織(UMNO)の総裁であるアブドゥル・ラーマンが人々の前で『カラム』を燃やし、UMNO党员が経営する喫茶店に『カラム』を置くことを禁じるまでになった。

このような『カラム』は、政府の成功物語として描かれがちなマレーシアやシンガポールの現代史を裏側から知る格好の資料だが、これまであまり注目されてこなかった。体制に批判的だったためマレーシアやシンガポールの公立図書館に体系的に所蔵されてこなかったことに加え、誌面がジャウィで書かれていたこともその理由の1つに挙げられる。

ジャウィとはアラビア文字を用いたマレー語の表記法で、かつてマレーシアやインドネシアで広く使われていたが、20世紀前半までにローマ字表記が普及し、現在では日常生活でジャウィを目にする機会はほとんどない。マレー語雑誌も1960年代までにジャウィからローマ字に切り替えていき、そんな中で『カラム』は停刊までジャウィを維持した。

京都大学地域研究統合情報センターでは、「ジャウィ

文献と社会」研究会と合同で、マレーシアのクラシカ・メディアやコタブクと協力して、『カラム』の記事を収集し、オンライン・データベースを作成するとともに、記事本文をローマ字に翻字して『カラム』を復刻するプロジェクトを進めてきた。

2013年9月11日、クアラルンプール市内で行われた『カラム』復刻記念ワークショップでは、幸運にもエドルスのご遺族の出席を得た。最年長のアフマド・ルトフィ氏は、亡き父が残した仕事と44年ぶりに対面し、自分が7歳のときに亡くなった父親に想いを馳せるとともに、それが今日のマレーシアで意義を持っていることを喜んだ。

『カラム』記事データベースは<http://majalahqalam.kyoto.jp/>で公開されている。



電子版で復刻された『カラム』を手取る創刊者の子息たち

< 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州の民族分類やジャウィ(アラビア文字表記)の社会的役割、災害復興時の社会形成など関心領域は広く、東西マレーシアおよび周辺諸国でフィールドワークを繰り返している。日本マレーシア学会(JAMS)運営委員長。